究極のボランティアが支える ヤングケアラーSOS

ほっとTタイム 市長対談

全国に先駆けて令和4年に開始したヤングケアラーSOS事業。子どもたちを支援するサポーターの派遣は、9月で3年目を迎えました。今回は、全国から注目されるこの取り組みにおいて、実際に支援の現場に関わる皆さんにお話を伺いいます。

岸 一美さん

ヤングケアラー SOSサポーター。支援を担当する現場では、掃除や片付けを担当。子どもたちも参加して、一緒に片付けてくれることも

阿久澤 ゆかりさん

ヤングケアラー SOSサポーターとして現在6件の家庭を支援中。特に中華料理が得意で、利用者から「ご飯がおいしい」と喜ばれることもあるそう

秋山 美樹さん

ケアサプライシステムズ㈱。ヤングケアラー SOS相談員を務め、市職員とともに家庭を訪問。支援方針の検討や、派遣するサポーターの調整役を担う

新井 正昭さん

ヤングケアラー支援推進委員会委員長。長年にわたり民生委員児童委員を務めるなど、児童福祉分野で豊富な経験を持つ。高崎市社会福祉協議会会長

富岡 賢治市長

「高崎の子どもは高崎で守る」という信念のもと、ヤングケアラーSOS、子育てSOS、児童相談所新設など、子どもや子育て家庭を支援するための施策を実践

スタートから3年目を迎えて

市長　ヤングケアラーの問題は、近年全国的に取り上げられるようになりましたね。これは、介護が必要な祖父母や体調の悪い両親の世話、家族の食事の用意や洗濯などのために、遊ぶ時間や勉強など自分の時間を持てない子どもたちをどのように支援するか、という問題です。本市では、議論や調査ではなく、子どもたちを具体的に支援しようという考えで、ヤングケアラーSOS事業をスタートしました。この事業の支援推進委員会の委員長を、民生委員児童委員を長年務めていらっしゃる新井さんにお願いしましたが、突然にお願いしたものですから、びっくりされたんじゃないですか。

新井　そんなことはありませんよ。市長の「高崎の子どもは高崎で守る」という強い信念のもと、全国の先陣を切ってヤングケアラー支援を始めると聞き、引き受けるのが当然だと思いました。教育委員会に担当を置いていただいたので、学校と密に連絡が取れ、福祉の部門ともうまく連携して、家庭への支援が円滑に行われています。

市長　子どもの様子を把握しやすいのは学校や教育委員会なので、教育委員会に担当を設置しました。この事業では、支援が必要な子ども一人一人に、その子どもに関係する学校の先生や民生委員をはじめとする地域の方々、福祉部などの関係機関を交えたワーキングチームを設置して、その子どもの環境や状況に応じた支援を検討します。電話があったらすぐに支援に行きましょう、という簡単な話ではありませんからね。

新井　支援推進委員会では月1回、ワーキングチームの報告に基づき、支援内容を審議し、決定しています。緊急の案件の場合は委員長判断で支援を決定することもあるので、担当から随時連絡があり、とてもスピーディーに支援が行われていますよ。事業開始からこれまで50件の家庭にサポーターが派遣されましたが、関係者の皆さんには本当に感謝しています。

市長　支援に抵抗のある家庭もあると思いますが、いかがですか。

新井　最初は抵抗のある保護者でも、担当職員が2回3回と根気強く訪問を重ねることで信頼関係が生まれ、最終的には支援に対してありがたいと感謝されることが多いそうです。

市長　実際に支援の行動に踏み切った自治体は本市だけです。これは教育や子どもの貧困、福祉の狭間にある複雑な問題で、良いモデルケースになると思うので、この活動は引き続き積極的に取り組んでいきたいと思っています。

「子どもたちを助けたい」大人たちの思い

市長　続いて、実際に支援を行うサポーターが所属し、本市の『介護SOSサービス』にもご協力いただいているケアサプライシステムズの皆さんにお話を伺います。まず秋山さんは、他のところにお勤めだったのに、ヤングケアラーSOS事業に携わるために仕事を変えたそうですね。

秋山　以前は高齢者の介護施設に勤めていたのですが、ヤングケアラーに関するニュースを見て、私の子どもの周りにも親御さんの介護をしている子がいたこともあり、私も手伝うことができればと思い転職しました。

市長　秋山さんは、この事業でサポーターの調整役を担っていただいていますね。

秋山　はい。職員の方と一緒に家庭を訪問して、ご家族がどんなことで困っているのか伺い、実際に派遣されるサポーターに具体的な支援方法をお伝えします。様々な事情を抱えるご家庭があるので、支援の内容も、家庭ごとに異なります。

市長　続いて、阿久澤さんと岸さんには、サポーターとして実際に支援に行っていただいていますが、どのようなきっかけでこの事業に参加されたのですか。

阿久澤　私は広報高崎でヤングケアラーの支援が始まることを知りました。私自身も幼い頃、同じような経験があったので、この仕事に携わりたいと思い、市役所に電話して紹介してもらったんです。

岸　私は、テレビでこの事業が取り上げられた時、サポーターが訪問したご家庭の高校生がとてもうれしそうにしている様子を見て、私も協力したいと思い参加しました。

市長　訪問する家庭には何歳くらいの子どもがいますか。

岸　小さい子から高校生くらいまでですが、私の場合は小学生が多いですね。

市長　当初、ヤングケアラーは中学生や高校生を想定していましたが、実際にこの事業を始めて、小学生が多いということが分かりました。小学生は、大人から見ると大変な思いをしているなと思うことでも、本人は不満に思わず、当たり前のように多くの家事労働を担っていることが多いようですね。

阿久澤　私も小学校3年生の時に母が病気で長期間入院していましたが、大変な時はお手伝いするのが当たり前、という感覚で家事を行っていましたね。

市長　お二人はそれぞれ、派遣先の家庭ではどのような支援を行っていますか。

阿久澤　私は調理を担当しています。頼まれたメニューを作ることが多いのですが、冷蔵庫の中にある食材や調味料を見てレシピを考えて作ることもありますよ。

岸　私は掃除を担当していますが、なるべくテーブルの上を片付けて、宿題ができるスペースを作るようにしています。家で宿題に取り組む時間がなくて、勉強に付いていけなくなってしまわないようにと思っています。

市長　皆さんのようにサポーターをやりたい、という人は結構いるんですか。

秋山　おかげさまで、会社にお電話いただいて、サポーターに登録する方が増えていますね。

市長　上手くサポーターが集まっているようですね。介護をしたり、家族のために食事を作ったりしている子どもを助けたい、という気持ちのある方が多く、大変ありがたいです。このようなボランティア精神のある方々が集まる仕組みを持つ法人がなければ、この事業は実現しませんでした。社会に貢献する活動は他にもありますが、ヤングケアラーや家庭を支援するこの事業は、長く続いていくことですから、皆さんのような人材は本当に貴重です。究極のボランティアだと思いますよ。

この事業が目指す社会

市長　最後に、市民の皆さんや子どもたちに向けて一言お願いします。

新井　子どもは宝です。将来大人になり、社会を支えてくれる存在です。市民の皆さんには、気になる子がいたら、ささいなことでもご相談いただきたいですね。

秋山　支援している子どもが、ほんの少しでも心にゆとりが生まれると良いなと思っています。この事業がもっと認知され、社会全体で温かく見守っていけるようになると良いですね。

阿久澤　人と比べることなく、自分の人生を確実に歩んでいってほしいと願っています。安心して子どもたちが暮らせる世の中になってほしいです。

岸　自分のやりたいことを見つけて、頑張れる気持ちを持ち続けられるようになってもらいたいです。

市長　皆さんのように、社会全体が温かい心で子どもを見守る社会にしていきましょう。本日はどうもありがとうございました。

一同　ありがとうございました。

対談の様子を動画でご覧いただけます

次のページで、事業の詳細を紹介しています ←